

[国 語]

読みを深めるための指導の工夫

ー登場人物の気持ちのターニング・ポイントに気付かせてー

横山麻衣子*

1 はじめに

「読む力」は全ての学習の根幹となる力であると考え。一昨年担任した2年生の学級のNRT（全国標準学力検査／集団基準準拠検査）の結果は、「読むこと」領域の偏差値が全国平均を大きく下回り、中でも「場面を想像しながら読むこと」「内容を考えながら音読をすること」が大きな弱点となっていた。教師の読み聞かせには目を輝かせながら聞き入り、お話の世界を存分に味わうことができる子どもたちである。しかし、自分で読んで内容を理解する力が足りないため、場面の様子を想像できない。さらには、自分で本を読むおもしろさを実感することができない実態がその結果に表れていた。この子どもたちに学力向上の根底を担う「読む力」をつけたい、読書の楽しさも知ってほしいという思いをもち、読解力を高める指導の方法について考えることとした。

2 主題設定の理由

読解力向上の方法として藤田氏¹⁾ (2006) は、低学年の物語教材では、「教材を読んで自由に想像する段階が必要である。自由に想像を広げ、場面の様子や登場人物の気持ちなどを想像豊かに思い描き、自分の思いや考えをはっきりさせて、読書をする意欲や書いたり話したりする表現意欲へつなげていくのである。このことが確かな読解力を身につけていくことにつながっていくのである。」としている。そして、その具体的な方法として、「絵や写真などを見て想像を膨らませながら読む」、「本文と挿絵を対照させて読む」、「音読を繰り返して動作化する」を挙げている。そこで本実践では、これをふまえて、読みを深めさせる授業を構想することとした。また、物語教材は「起・承・転・結」や「発端・展開・葛藤・クライマックス・終局」のように場面構成されていることが多い。この点に着目し、物語が山場を迎え劇的な変化が起こる「転」や「クライマックス」の場面で、「登場人物の気持ちが変わったところ（ターニング・ポイント）」に気付かせることによって、一層読みが深められるのではないかと考えた。

3 研究仮説

低学年の物語教材の指導において、登場人物の様子を場面ごとに正しく読み取らせながら物語を読み進めていく中で、気持ちのターニング・ポイントに気付かせていくことが、読みの深まりにつながる。

4 研究の内容と方法

- (1) 研究内容①：目的意識をもって読むことができるゴールを設定した単元を構想
 - ・方法①：魅力的なゴールを設定し、読む目的を明確にする
 - ・方法②：目指す子どもの姿を明確にする
- (2) 研究内容②：登場人物の様子を正しく読み取らせるための指導の工夫
 - ・方法①：物語を何度も音読させる
 - ・方法②：挿絵と叙述を比較させる
 - ・方法③：大事な部分を書き抜かせる
- (3) 研究内容③：登場人物の気持ちのターニング・ポイントに気付かせるための指導の工夫
 - ・方法①：場面の様子を比較させる
 - ・方法②：ターニング・ポイントを話し合わせる

* 小千谷市立東小千谷小学校

5 実践

(1) 単元名 ようすを考えて読もう「お手紙」

(2) 単元の目標

・「だれが、どうした」に気を付けて場面の様子を読み取り、登場人物の様子の変化を想像しながら、場面が展開していくことに気付く。【読む】

・物語を読んで思ったことをもとに、登場人物に手紙を書く。【書く】

(3) 単元の計画

【この単元で目指す子どもの姿】

① 音読や挿絵と叙述を結び付ける活動を通して、登場人物の様子を想像する。(正しく読み取る姿)



② 人物の様子の変化を想像することを通して、場面が展開していることに気付く。(読みを深める姿)



③ 登場人物の変化に対する自分の思いや考えをもとに、手紙を書く。(自分の考えをもつ姿)

【単元の計画】(全12時間)

次	時	主な学習活動	評価
1 物語に興味をもつ	1	<ul style="list-style-type: none"> ・題名を読み、手紙を書いたりもらったりした経験を話し合う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> ものがたりのとうじょう人ぶつにお手紙を書こう </div> <ul style="list-style-type: none"> ・「お手紙」の範読を聞き、おもしろいと思ったところをノートに書いて発表する。 	【関】自らの経験を話したり、本文のおもしろいと思う箇所を指摘したりしている。
2 正しく読み取る	2	<ul style="list-style-type: none"> ・全文を読み、だれの会話文であるか確認してシールをはる。 ・本文を声に出して読む練習をする。 ・物語を4つの場面に分け、番号をつける。 	【読】だれの会話文であるか分かる。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・1の場面(発端)を読み、だれが、どこで、何をしているのか確認する。 ・がまくんの気持ちを読み取る。 	【読】だれが、何をしているのかや、がまくんの気持ちが分かる。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・がまくんの悲しい気持ちが表れるように、1の場面を役割音読する。 ・挿絵と会話文を線で結ぶ。 	【読】挿絵と会話文を対応させ、線で結ぶ。
	5	<ul style="list-style-type: none"> ・2の場面(展開)を読み、がまくんが何をしたのか確認し、役割音読をする。 ・挿絵と会話文を線で結ぶ。 	【読】かえるくんが何をしたかが分かり、挿絵と会話文を線で結ぶ。
	6	<ul style="list-style-type: none"> ・3の場面(葛藤)を読み、だれが、何をしているのか確認する。 ・会話文や挿絵から、二人の様子を話し合う。 	【読】だれが、何をしているのかと、3の場面での二人の様子が分かる。
	7	<ul style="list-style-type: none"> ・ふてくされているがまくんと、励まそうとするかえるくんの様子が表れるように、3の場面を役割音読する。 	【読】二人の様子が分かるように役割音読をする。
	8	<ul style="list-style-type: none"> ・4の場面(クライマックス)を読む。 ・4の場面と1の場面の挿絵を比較し、気持ちがどのように変わったのか確認する。 ・がまくんの気持ちが変わった会話文はどれか話し合い、読み方を考える。 ・手紙を待つ間の二人の会話を想像して、「」に書く。 	【読】がまくんの気持ちがどのように変化したかが分かる。 しあわせな気持ちで手紙を待つ二人の会話を想像して書く。

	9	<ul style="list-style-type: none"> ・がまくんの気持ちの変化が表れるように、4の場面を役割音読する。 ・5の場面（終局）を読み、場面の様子を理解する。 	【読】二人の幸せな気持ちが分かるように役割音読をする。
3 自分の考え・意見をもつ	10 11	<ul style="list-style-type: none"> ・物語の登場人物のだれにあてて手紙を書くか決める。 ・書き方を知り、手紙を書く。 	【書】一人の登場人物にあてて、思ったことを手紙に書いている。
	12	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた手紙を発表する。 	【関】書いた手紙を進んで発表している。

(4) 正しく読み取らせるための手立て

① 意欲的に音読に取り組ませる工夫

授業の中では、一斉読み、一文読み、役割読みなどで読みの形態を変えながら、飽きさせずに繰り返し音読できるようにした。また、音読カード（図1）を用意し、家庭学習でも教材文の音読に取り組ませた。

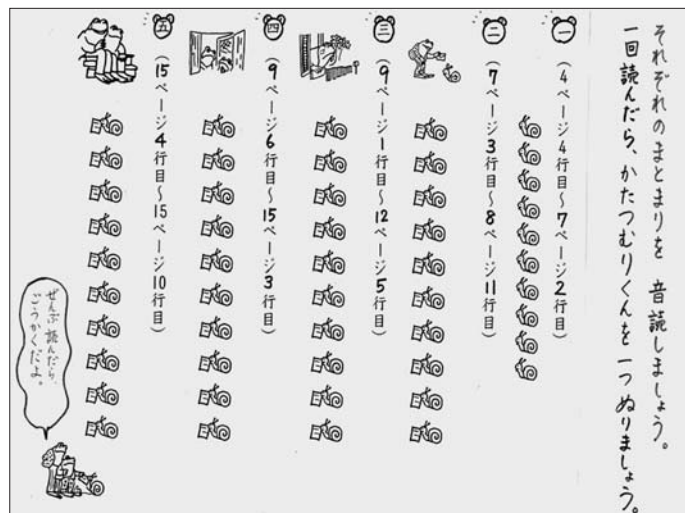
時間	範囲	読み方	その他
1	全文	教師の範読	「音読大作戦」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭での音読 ・ 教師の前での音読 「役割音読のための場作り」 <ul style="list-style-type: none"> ・ がまくんとかえるくんのお面 ・ 家、ポスト、いすなどの小道具
2	全文	一斉読み	
3	1の場面	一斉読み、全員で役割音読	
4		グループで一文読み、グループで役割音読	
5	2の場面	一斉読み、一文読み、グループで役割音読	
6		一斉読み、かえるくんの会話文だけ読む がまくんの会話文だけ読む	
7	3の場面	グループで役割音読	
8		一斉読み、グループで役割音読	
9	4・5の場面	一斉読み、グループで役割音読	

特に、グループでの役割音読では、友達の前で発表することを楽しみにし、意欲的に練習する姿が見られた。気持ちが分かるように抑揚をつけながら読みを工夫することもできた。役割音読の雰囲気を持ち上げるための道具も、よい意欲付けとなった。

また、「音読大作戦」では、相手を保護者や担任教師だけではなく、学校の職員全てに広げた。様々な先生から音読を聞いてもらったり、励ましの言葉をもらったりすることを楽しみに、活発な活動になった。これらの活動全てを通して、子どもたちは物語に浸っていくことができた。

② 挿絵と叙述を対応させながら様子を想像させる

この物語には、各場面に著者自身が書いた挿絵が配置されている。挿絵はその場面の様子を想像することの一助となる。まず、挿絵で登場人物の様子を読み取らせ、次に、その様子を表わす叙述にサイドラインを引かせた。



【図1】音読カード

T：（黒板の挿絵を提示して）「どっちがかえるくんで、どっちががまくんでしょう。」

C：すぐにかえるくんとがまくんを示す。

T：「すごいね、なんで分かったの？」

C：「緑色だから。」「色で。」

T：「それって本当なの？」

C：「がまくんは、げんかんに住ってました、って書いてあるから、すわっているのががまくん。」

低学年の子どもたちは挿絵を手がかりに内容を理解する傾向にある。しかし、挿絵だけの理解では、一部しか分からないこともある。文中からその根拠となる叙述を見つけ出すことが大切であると考え、下記のように挿絵に合う叙述にサイドラインを引かせることとした。

T：「がまくんを見てごらん。どんな顔をしている？」

C：「かなしそう。」

T：「そうだね。教科書の文の中にもかなしそうなことが分かる言葉が書いてあるよ。探してその横に線を引いてごらん。」

C：「今、一日のうちで一番かなしいときなんだ。(中略) とてもふしあわせな気持ちになるんだよ。全部。」

T：「その文全部なんだね。全部に引いていいかな。」

C：「だめ。かなしいとふしあわせだけ。」

C：「ふしあわせって？」

C：「かなしいってこと。」

C：「ふ・・・しあわせ。しあわせの反対ってこと。」

C：「ふまじめ。まじめ。ふしあわせ。しあわせ。」

C：「とてもかなしいってこと。」

T：「つまりどういうこと？」

C：「かなしい。」

C：「ふしあわせ。」

C：「かなしくって、ふしあわせ。」

文中から根拠を探し、話し合っていく中で、「ふしあわせ」という言葉の意味が理解できなかった子どもが、他の子どもたちに教えられながら理解していく様子が見られた。

③ 大事な部分を書き抜く

文章の一部を空欄にしたワークシート(図2)を用いて、それぞれの場面ごとに文中の言葉を書き抜く活動を取り入れた。「教科書をしっかり見て書いてね。」と声がけすると、すぐ答えが頭に浮かんだ子ども、一旦教科書に目線を移し、確認してから書く様子が見られた。どんな言葉が入るのか考え、確認して「書く」というステップをふむことで、場面の様子の正確な理解へとつながった。

簡単なワークシートではあったが、ファイルしていくことにより振り返りにも使うことができ、理解を確実なものにするのに有効な手立てとなった。

(5) 「読みを深める」ための手立て

① 挿絵や叙述を比較させ、場面の展開に気付かせる

8時間目、物語の発端(1の場面)とクライマックス(4の場面)の挿絵を提示し、その違いについて比較させた。



【図2】書き抜く・線を結ぶためのワークシート

T：(1の場面と4の場面の挿絵を並べて提示する)「2つの絵を比べて、違うところはどんなところでしょう。」

C：「1の場面(以下①)は二人ともかなしそう。4の場面(以下④)はうれしそう。」

C：「(④は)つま先があがっている。」

C：「①は一人で手を組んでいる。④は肩を組んでいる。」

C：「①はふしあわせで、④はしあわせそう。」

T：「どこからしあわせそうって分かるのかな？」

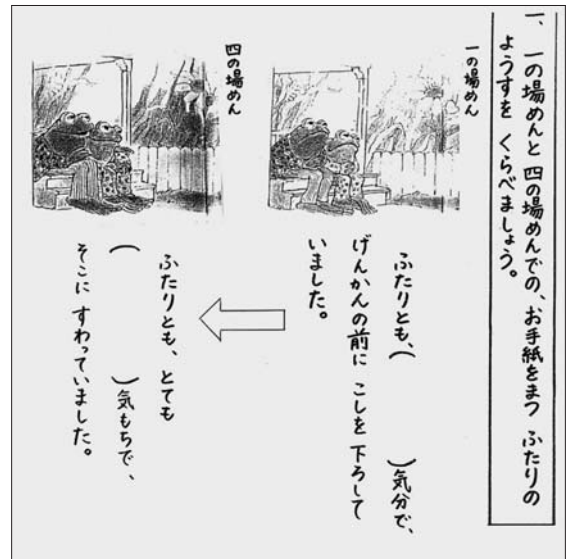
C：「だって、顔が笑っているよ。」

子どもたちは、似ている2枚の絵をじっくり見比べながら違いを探した。この後、教科書の叙述を書き抜かせると、教科書をめくりながらそれぞれの挿絵の叙述を素早く見つけ、ワークシート（図3）に記入することができた。

そして、叙述を比較することで、改めて2つの場面は「かなしい気分」と「しあわせな気持ち」という相反する気持ちが表れる場面であることを確認できた。

② 登場人物の気持ちのターニング・ポイントを話し合わせる

物語は第1場面（発端）、第2場面（展開）、第3場面（葛藤）、第4場面（クライマックス）、第5場面（終局）の5場面で構成されている。場面ごとに登場人物の様子を読んでいくと、第4場面で登場人物の様子ががらりと変わる。この場面に注目し、読み取らせていくと物語のテーマに関わる深い読みができると考え、8時間目、登場人物の気持ちのターニング・ポイントを話し合わせた。



【図3】 2つの場面を比較するワークシート

T：「どこの部分からがまくんはしあわせになったのかな？ここだと思う文にサイドラインを引きましょう。」

C：「親愛なるってところだと思う。」

C：「とてもいいお手紙だ、だと思う。」

C：「私もとてもいいお手紙だ、のところ。満足しているみたいだから。」

C：「ほくも。お手紙もらって、うれしそう。」

T：「だってのところに線を引いた人もいるよね。」

C：「はい。だってって、かえるくんが話して、お手紙がもらえるのが分かったから。」

C：「ほくも。お手紙を書いてくれた人が分かったから。」

C：「ほくはお手紙のところ。なんて書いてあるかわくわくしたから。」

C：「いいことが書いてあるから、喜んでいるんだよ。」

T：「どんないいことが書いてあったの？」

C：「親愛って言葉かな？」

話し合いの中で、答えが一つにまとまることはなかった。しかし、ターニング・ポイントについて話し合う中で、がまくんが手紙をもらったうれしい気持ち、それがどれほどうれしいことなのか、物語のテーマに近づく意見が出てきた。

話し合いの後、役割音読をさせると、がまくんの喜びだけでなく、驚きやしあわせをかみしめている様子、二人で肩を組んで手紙を待つ様子などを声や表情、身振りで表わすことができた。ターニング・ポイントに着目させることで、読みが豊かになったことが伺えた。

5 成果と今後の課題

(1) 目的意識をもって読むことができるゴールを設定した単元構想について

単元の終末に「登場人物に手紙を書く」を主目的としたことで、登場人物の行動や心の動きに着目して詳しく読み取ろうとする意識を高めることができた。この単元以前は、「書く」活動になると、何を書いていいかが分からず戸惑う子が何人かいた。それが、この単元の終末には、全員が自分の思いをもち、迷うことなく手紙を書くことができたようになった。この単元での「読む」活動で身に付けた力が、「書く」活動にも効果的に働いていたと考えられる。

読みの目的を明確にすることで、子どもたちの意欲を高めるだけでなく、学習の見通しをもたせ、主体的に読み取る態度を育てることができたのではないだろうか。

(2) 登場人物の様子を正しく読み取らせるための指導の工夫について

「物語を何度も音読させる」「挿絵と叙述を比較させる」「大事な部分を書き抜かせる」という活動は、どれも登場人物の様子を正しく読み取らせるために有効な方法であった。

しかし、本実践では、「大事な部分を書き抜かせる」活動で、書き抜かせた言葉は少なく簡単であり、子どもたちにとって的確なものであったか疑問が残った。新学習指導要領では、「話す・聞く」「読む」「書く」を関連させ、言語活動を一層充実させることが求められている。言語活動を一層充実させた授業にするために、本実践で行った手立ての質や量をどのように工夫していくかが今後の課題である。

(3) 登場人物の気持ちのターニング・ポイントに気付かせるための指導の工夫について

「場面の様子を比較させる」ことについては、まずは挿絵で様子を比較させ、その後、叙述を確認するという流れで行った。最初に挿絵で比較させたことにより、読むことが苦手な子どもでも、人物の様子の変化を視覚的に捉えることができた。さらに叙述に返らせることによって、変化が叙述にも表れていることを確認することができた。さらに、比較によって、「その変化はなぜ起きたのか」という疑問が子どもたちの中で生まれ、自然な流れでターニング・ポイントについての話し合いにつなげることができた。挿絵はないので叙述のみをたよりに読む必要性が生まれる。その結果、言葉の一つ一つについて考えたり、登場人物に寄り添いながら気持ちを想像したりすることができた。「場面の様子を比較させる」「ターニング・ポイントについて話し合わせる」は、どちらも読みを深めるために有効な方法であったといえるだろう。

以下は、単元の1時間目、初発の感想と単元の最後、子どもたちが登場人物にあてた手紙の記述である。

	初発の感想	登場人物にあてた手紙
M児	一ばんおもしろかったことは、かたつむりが「まかせてくれよ。すぐやるぜ。」と言ったのに4日もたったこと。かたつむりはもっと早く行けると思ったからびっくりした。	かえるくんへ がまくんにお手紙をもらったことがないからお手紙を書いたんだよね。かえるくんは、がまくんによろこんでもらいたかったんだよね。わたしは、親せつだと思ったよ。心がきれいだと思ったよ。やさしく親せつでとてもいい人だと思ったよ。がまくんもよろこんでうれしかったと思うよ。
R児	一ばんすきだったのは、かえるくんがまどから外をのぞいているところ。かたつむりくんが「すぐやるぜ」って言ったのに、どうしてそんなに時間がかかるのかと思った。かたつむりだから歩くけど、そんなにかかるかな。	がまくんへ がまくんはお手紙くるのがさいしょは分からなかったから、すぐにお手紙をまつのをやめたんだね。かえるくんから教えてもらったから、4日もまてたんでしょ。4日もまてて、すごいね。もっとお手紙もらえたらいいね。がまくんの気持ちがたわってよかったね。
K児	一ばんおもしろかったのは、4日たって手紙が来たことです。わけは、90時間まっていたからです。びっくりしました。	かえるくんへ がまくんがかわいそうだから、がまくんにお手紙を書いたんだね。ほくは、やさしい気持ちの人だと思いました。

M児は、最初かたつむりくんのことを感想に書いていた。最初の読みで本児が心を惹かれたのはかたつむりくんだったのだろう。それが、登場人物に寄り添って読み進めていくことを通して、かえるくんの優しさに気が付き、単元の終わりにはかえるくんに手紙を書いた。R児は、最初に手紙が届くのに時間がかかることを読み取り、かたつむりくんの行動に対して疑問をもっていた。手紙にも手紙の時間のことが書いてあるが、読みの対象ががまくんへ移り、がまくんがその時間を待つことができた理由について分析した記述となっていた。K児は、最初に物語の内容よりも「4日」という言葉に反応していた子どもである。単元を通して、登場人物の気持ちを想像する読みへと変わっていったことが分かった。

6 おわりに

この単元と同時に毎日の家庭学習での音読が始まった。しばらくすると、休み時間に教師の前で音読に取り組む子が現れた。そんな友達の姿に影響されて、他の子も休み時間に音読に励むようになった。さらには、担任教師だけでなく、学校中の教師を巻き込んでの「音読大作戦」へと変わっていた。

あまり読むことが得意でなかった子たちが、みんなと一緒に大きな声で教科書を読むようになった。授業の中で自分が読みたいと自信をもって手を挙げるようになった。中には、本単元でねらっていた「読みを深める」姿まで迫ることができなかった子もいたが、読むことに対する抵抗は払拭され、ねらいに向かって自分でやってみようとする態度をはぐくむことができた。

参考・引用文献

- 1) 藤田慶三編『読解力を高める文学的文章の指導 低学年』東洋館出版社、2006年、9p